

ミュージアム 通信

その男、 戯作者にして 化粧品 プロデューサー

〔企画展のご案内〕

「悦楽の磁器—有田の化粧道具」開催

〔作品展示会のご案内〕

たなかふみえ・川崎 精一

「未来の匠」—有田焼 ふたり展—開催

「東都本町式丁目ノ景」(部分) 国輝 画・当館所蔵
女性が手に掲げるのは当時のヒット化粧品「江戸の水」。



その男、戯作者にして化粧品プロデューサー

副業で売れちゃいました
天保七年(一八三六)、江戸の名店を漢詩文体で紹介した『江戸名物狂詩選』が刊行される。呉服の越後屋に、お茶の山本山、饅頭の塩瀬など、現在老舗として知られる名店とその代表的商品とが載る本書であるが、ここに戯作者式亭三馬が手掛けた化粧品「江戸の水」が名を連ねている。滑稽本『浮世風呂』(文化九年)や『浮世床』(文化一〇年)で知られる江戸時代後期の作家式亭三馬(一七七六—一八二二)は、執筆業の傍ら薬屋を経営、売薬を製造・販売して財を成した。この成功の契機となった商品のひとつが、「江戸の水」であった。『江戸名物狂詩選』刊行時、三馬はすでに死去しており、江戸の水発売から二〇年以上経過しているにもかかわらず、根強い人気を誇る商品だったと察せられる。本書では江

江戸の水が「大流行」し、「八百八町の娘」たちがこぞつてこれを求め、化粧をしたと謳う。だが実際のところ、江戸の水の主要顧客層は御殿女中らで、市井の一般女性が使うのは稀であった。名物紹介に多少の誇張が伴うことには目をつむるとして、江戸の水の発売にかかる仔細を三馬の日記から見ていくとしよう。

資材費は削ってなんぼ！

三馬の記した日記『式亭雜記』は、文化七〜八年（二八一〇〜一一二）の二年間のみ今に伝わる。これによると江戸の水は文化八年二月に発売、容器は硝子製の徳利形、箱入りであった。価格は四八銅（一文）、現在の貨幣価値に換算すれば約七八〇円となる。これに先立ち三馬の店では、「お歯黒のはげぬ薬」と銘打った化粧品「露」を発売、同じく硝子瓶詰め、箱入りで売

価四八銅、これが「世上に大きく流行」していた。このヒットに続く新商品として江戸の水が企画され、これまた予想を上回る売れ行きとなった。

さて、この硝子製の容器だが、当初、大伝馬町三丁目硝子職人、平井善右衛門に製作を依頼した。一〇〇文につき一〇個製作、つまり硝子瓶の単価は一〇文（約一六〇円）であった。ところが、両国米澤町の硝子屋が「百文に付き十六」個製作可能と申し出てきた。単価は約六文（約一〇〇円）に減額、両国の硝子屋に発注する運びとなった。ちなみに三馬は容器の重さにもこだわったようで、前者が製作したものは一瓶あたり約六グラム、後者は約五グラムと、わずかだが軽量化に成功した。また、その仕上がりについて「至極よし」と記し、満足していた様子が見える。

さらに外箱の製作費も知ることができ、越谷の大迫村の箱屋と江戸の浅草福井町の箱屋双方に「百文に付き十四」個、単価約七文（約一一〇円）で発注していたが（初回発注数は三千個余）、のちに越谷の別の箱屋が「百文に付き数十六」製作できるとアピール。結局、三馬は後者に切り替え、容器同様単価約六文で箱を仕入れたのである。

大・中・小のサイズ展開、詰め替えも対応します

日本橋本町二丁目にあった式亭三馬店では、新春の景品として顧客に双六を配った。江戸の水をはじめ「吾妻香」「妙あらひ粉」「匂ひ袋」「毛はへ薬」など、当時三馬店で取り扱っていた商品の図を各升に描き、その脇に商品紹介文（三馬の息子、小三馬が執筆）と売価を添えた。このうちのひとつ「賑式亭繁栄双六」を

例に挙げよう。江戸の水の升には「大箱百五十文（約二五〇〇円）」「中箱百文（約一六〇〇円）」「小箱五十文（約八二〇円）」とあり、異なるサイズを用意し、消費者のニーズに応える工夫をしていたことがわかる。また、瀬戸物製の容器による販売もあり、こちらは「代二百文（約三三〇〇円）より御のぞみ次第」であった。既述のとおり、発売当初、江戸の水の価格は箱入り四八文であったから、小箱で五〇文ということは、

おそらく値上げがあったのだろう。加えてこれらには詰め替え用もあり、大箱購入者は、使い終わったら容器を持ち寄れば中身の化粧水のみ一〇〇文で買えたのである。なお、中箱の場合の詰め替え代は六四文（約一〇〇〇円）、小箱は三二文（約五三〇円）だった。



左の双六より「江戸の水」の升を拡大・抜粋。



「賑式亭繁栄双六」三代豊国画・小三馬戯作・国立国会図書館所蔵

商品コピーもお任せ

三馬や山東京伝、柳亭種彦など、江戸時代後期の戯作者は販促ツールの制作分野でも活躍した。三馬に至っては他店の広告制作のみならず、自著に自舗製品の名を登場させる抜け目のなさである。

文化八年四月、三馬は江戸の水のコピーを変更する。「おしろいのはげぬ薬」から「おしろいのはげぬ薬」と改めた。同時に、江戸の水の引札を摺って「世上に散らし」、宣伝に余念がない。日記に見える三馬の行動は、文才だけでなく商才もなかなかのものであったことを物語る。

化粧品で起死回生

薬屋で成功する少し前、三馬は借金まみれだった。大病を患い、執筆業もままならず、稼げない日々が続いた。ようやく全快し、仕事復帰後間もなく、発売した化粧品が当たり、安定した生活を

取り戻したのである。

あいにく資料から江戸の水の原料の詳細を知ることは叶わない。ただ、当時、江戸の水のほかにも「花の露」や「菊の露」といった名で発売された化粧品があり、これらは「名を異にする」のみで皆「同製」であったという。おそろくどれも品質的に大差はなく、むしろ広告宣伝戦略に差があったのだろう。

さて、紙幅に限りがあり、今号はここまで。御殿女中らが求めた市販の化粧品ではなく、市井の女性たちが手製していた化粧品については別稿にゆずることとしたい。

※1『守貞漫稿』(天保八年)に「坊間の婦女これ江戸の水を用ふる稀也。御殿女中にはこれを用ふる者これ往々有り」とある。
※2 文化三年(一八〇六)三月に火災にあい、これ以前の日記は焼失。このち四年間ほど日記を付けず、再開したのは同七年六月であった。
※3 日記には「思いの外流行すと記す。」
※4 『洗髮柳春雨』(天保十一年刊)所載江戸の水の広告参照。
※5 『守貞漫稿』参照。なお、文化一〇年(一八一三)刊『都風俗化粧品』には花の露の製法が載っており、これによればノイバラエキスを基材としていたようだ。

作品展示会のご案内

たなかふみえ・川崎精一「未来の匠」——有田焼ふたり展——

2016年10月15日(土)〜12月4日(日)開催

江戸時代から続く紅作りの技と文化を守り伝える伊勢半本店が、工芸の世界で技を継承すべく日々研鑽を重ねる若手作家を支援したい思いから

はじまった「未来の匠」展。有田焼創業四〇〇年を迎える有田の地で、独自の作品作りに取り組む作家二名の作品展示会を紅ミュージアム・サロン

また、開催期間中には作家の技を直接指導していただく「作家に学ぶ体験講座」を併催します。作品とともに作家を知ることができる、紅ミュージアムならではの貴重な機会をどうぞお楽しみください。



上: たなかふみえ 下: 川崎精一 出品作品(一部)

作家に学ぶ体験講座

■「陶板・影彫り」体験講座

2016年10月22日(土)、23日(日)

講師: 川崎 精一氏

時間: 各日12:30~16:30

定員: 各日8名(定員になり次第、受付終了)

参加費: 4,000円(材料費・企画展観覧料込み)

■「吹墨」体験講座

2016年10月29日(土)

講師: たなかふみえ氏

時間: ①10:30~12:00 ②14:00~15:30

定員: 各回8名(定員になり次第、受付終了)

参加費: 3,500円(材料費・企画展観覧料込み)

※ご予約は紅ミュージアム(03-5467-3735)まで。



オリジナル紅器(一部)

企画展「悦楽の磁器―有田の化粧道具」

2016年10月15日(土)～12月4日(日) 企画展観覧料600円

この秋、紅ミュージアムでは、有田焼創業四〇〇年を記念して、江戸時代の化粧道具からみたら有田焼の発展を紹介する展覧会を開催します。

日本で初めて磁器生産に成功した有田は、四〇〇年もの間、磁器生産地としてその技術を連綿と受け継いでいます。有田焼は生産・流通システム、政治的背景、生活様式の変化、そして近代化の波などによって時代の時どきに適応した発展を遂げてきました。十七世紀後半には、海外での需要の高まりに応える形で、安定した製品供給を行う生産技術革新が起こります。しかし次第に海外での需要は厳しいものになっていくため、有田は状況に応じて生産の軸を国内需要にシフト

トさせていきました。

国内に磁器が広まる、と、それまで陶器や木器、金属器等で作っていた生活用品を、磁器でも製作するようになります。陶磁器類は、木製品や金属製品に比べ製作工程が簡便であることも一八世紀以降の有田の磁器が「使う」器として庶民にも広まっていった理由のひとつと考えられます。「化粧」にかかる道具類も、とくに紅猪口・紅皿、白粉溶碗・白粉重、嗽碗、油壺は、磁器製が優位に立ち広く浸透していきます。天皇家や大名

家の道具として詠えらるる高級なものから、庶民層にも手の届く大量生産の安価なものまでという化粧道具の質の広がり、磁器生産の多様化の一端といえます。

本展は、化粧道具を通して国内向けの有田窯業の展開を紹介する展覧会です。江戸時代、身分や階層差もしくは個人差によって使う化粧品に違いがあったとしても、化粧道具の形やメイク法には共通する部分がありました。また、化粧道具は日用品ではありませんが、華やかで悦楽な容器が多く、非日常を演出して

れるアイテムでもあるの

です。磁器生産がもたらした人々の生活様式の変化とともに、そこから生まれた化粧道具の色とりどりをご覧ください。

【開館時間】
10時～18時(入館は17時30分まで)
※毎週金曜日は10時～20時
(入館は19時30分まで)
【協力】
佐賀県立九州陶磁文化館・有田町教育委員会・東京都教育委員会・豊島区教育委員会
【後援】
佐賀県有田焼創業400年事業実行委員会
※観覧料と引き換えに企画展リーフレットが付きま



Information かわら版

期間限定商品のご案内

伊勢半本店では、9月1日～11月23日まで「小町紅『手毬』」秋季限定柄3種(各9,000円/税抜)を発売いたします。菊を大胆に配した「菊千代紙」、桔梗柄に浅葱色と橙色をあしらった「花てまり」、魔除けの意味を持つ麻の葉をデザインした「あさのは」。お子様の七五三に、大切な方への贈り物に最適の一品です。



小町紅『手毬』菊千代紙 (9,000円/税抜)

Since 1825 伊勢半本店 紅ミュージアム

●開館時間/10:00～18:00 ●休館日/毎週月曜日
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F

TEL&FAX:03-5467-3735

東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehanhonten.co.jp>